
FICTION-LINK

字紀 彦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F I C T I O N－L I N K

【Nコード】

N 4 1 0 3 A

【作者名】

字紀 彦助

【あらすじ】

F I C T I O N－L I N K：現実と非現実を繋げる力。少年夜空は先天的な心臓の病を15才の春に医療の進歩によって克服する。しかし生まれて初めて病院の外に出た夜空に渡されたのは、彼にしか見えず、使えない銃、フィクションライフルだった。特殊な薬物を飲むと姿を現す正体不明の怪物を相手に、夜空はやっと手に入れた健康な肉体と精神を蝕みながら戦っていく。ある日出会った清純な少女、朝日あさひ・こずえ梢への淡い思いを抱きながら…。

第一話

空が青い。空は青いが、そこに浮かぶ薄い雲はピンクがかったオレンジ色に染まっている。西側に振り向けば、あるいは空も赤いのかもしれない。そんな時間帯だった。

一人の少年が、住宅街を割って流れる川を橋の真ん中からぼんやりと見下ろしていた。見た目の年のころは12、3歳といったところだろうか、肘まで捲り上げたパーカーから細くやせた血色のよくない腕が覗いていた。左腕は手すりに無造作に乗せられている。ただ、右手はしきりと、腰に掛けられたホルスターを気にかけて、指を這わせていた。

途端、周囲の空気にピリリと緊張が走った。いや、おそらく周囲そのものに変化はない。その川と橋を主人公とした風景を一枚の絵と捉えようと、その画面の中でなにか変わったならば、それはあの少年だった。肩を強張らせている。右手は強くホルスターの少し上、グリップのあたりを強く握る。

：そこには何もない。指が白くなるほど握られているそこには。透明の銃。そんなものを握り締めているようだった。

全身の緊張感はそのまま崩さず、サイドに3本ラインの入った黒い膝丈のジャージのポケットからピルケースらしきものを取り出し、そこから3錠の白いカプセルを口へ放り込む。彼の動きに関連性は見出せない。それどころか意味さえわからない。けれど少年は、まるでとてつもない使命感を帯びたように眉間に深いしわを寄せ、眉を一直線に吊り上げていた。

少年がにわかに振り返り、走り出す。右手はやはり何もない場所を強く握り締め、しかしそれはもうホルスターを離れたのか胸の前で

左手を添えられていた。

少年は川原へ駆け下りた。頭をしきりに上下左右へ動かし、視界に何かを捕らえようと必死であるようだ。右手を突き出し、まるで本物の銃を構えるようなしぐさをした。さらに、1，2発撃つような動きもする。かと思えば、なにかから身を守るようにすばやく屈んだり、何者からかの攻撃をよけるように跳躍したりした。川原にはもちろん何もない。猛獣や怪物などはもちろん、人間も一人もいない。少年はまるで何もない場所に何かが見えているかのようだった。一人ヒーローごっこにしては緊迫感が過ぎている。

少年が強張った顔を更に歪める。次の瞬間、なにもないはずの少年の右脚から血が流れ出た。

傷をかばい崩れたバランスの中で少年は更に腕をまっすぐに伸ばし、何発も撃った。ような動きをした。

そして撃った先を確認するような目つきを数秒したあと、少年はほっとしたように目を閉じ、川原の草の上にぺたりと座り込んだ。

「…夜空です…済みました」

取り出した携帯電話にむかって少年は喋った。スピーカーから返答と思われる音が流れたが、言葉として聞き取れるのは音源に耳をつけている少年だけだった。

「はい、右足に少し食らいました…。大丈夫です。……そっちに戻らなくても、自分で…。薬はまだ十分あります。ええ。なくなる時、取りに行きますから…。はい、じゃあ、また………」

少年は川原の柔らかな草の上に大の字に寝そべった。眉間の力をわずかに抜き、目を閉じる。

足から血が流れ出続けていること以外は、普通の子供と何の変わりもない。

その傷を黙殺し、少年は寝転び続けた。目の下には青黒い隈が浮かんでいる。唇を薄く開けてまどろむ様子は安らかそうにはまず見

えず、むしろ、もしその目じりから涙が流れ落ちていたとしても違和感をおぼえそうになかった。

F I C T I O N — L I N K

字紀 彦助

「目標、消滅しました」

コンピュータと精密機器でゴった返すある場所。そこには白衣を着た男が5人ほど、コンピュータに顔をうずめるようにして、画面から出る光に青白い顔を反射させていた。

「夜空は無事か」

リーダー格らしい、研究者の割りに体格がよく精悍な面差しをした30代前半ほどの男が凜とした声を張り上げた。

「いえ、右足を負傷したようです、常盤木主任」

受話器を持った研究員がリーダーへ向き直って言った。

「なに、それなら早くこちらへ戻るように言ってくれ」

「それが自分で処理できるということ……接続剤がなくなればまた寄ると」

リーダーは癖なのか、親指の爪を噛んだ。噛みながら、深く考え込んだ。

「……最近夜空はますますここを避けるな。嫌われてもしようのないことを強制しているから当然だが」

「嫌われるのは承知のうえだったのでは？　しかし我々を嫌うことが彼の精神衛生上、ひいては戦闘能力に余りに影響を及ぼすようであれば、改善の必要性はあるでしょうが」

リーダーの近くにいたほかの研究員が口を挟む。

「そうですね、円滑な人間関係がもたらす健康や寿命への良い影響は知られているとおりだ。そして逆もまた然り、と」

更に、ついさっきコーヒーを持って部屋に入ってきた研究員も話題に加わった。これでこの部屋にいる研究員のほぼすべてが会話に参加していることになる。

「……そんなんだから嫌われるんだろうな、俺たちは」

リーダーはあきれたように呟いた。そして白衣を脱ぎながら呼びかけた。

「なあ、消毒液とガーゼをくれ。それと包帯も。夜空の位置はまだ捕捉できているんだろう？」

「あの、…大丈夫ですか？」

痛みも忘れて眠りに落ちかけていた少年を叩き起こしたのは、耳にするりと入るような心地よい少女の声だった。少年は条件反射で瞼を起こし、声のしたほう…つまり、後方へ視線を動かした。

「……？」

少年は、自分から見て逆さに移った目の前の少女の顔をまじまじと見つめた。二つに結んだ髪が少年のすぐ鼻先まで垂れている。目鼻の位置がよく整っていて、どこのパーツが特にすばらしいということとは無かったが見る人に清潔な印象を与える少女だった。おそらく高校生なのだろう、黄色いタイを結んだ紺色のセーラー服を着ている。短すぎないスカートの丈がむしろ少女のイメージとスタイルにぴたりと似合っていた。

少年はいぶかしげな顔をした。まんざら知らない顔でもないらしい。ただ知り合いというほどでもないようだが。

「…きみは…毎日ここを通る…？」

「ええ、そう。わたし、ここが通学路なの。あなたはあそこの橋に毎日いますよね。気づいてくれてたんだ」

「だって…ボクがここに居るのはせいぜい10分かそこらなのに、きみはその時間に必ずここを通るんだもの」

「そうだったんですか、奇遇ね」

少女は小首をかしげるようにして笑った。

「それよりも、足、大丈夫ですか？　すぐ手当て、しないと」

少年は起き上がると右足を上にして胡坐を組んだ。血はだいぶ止まっていたが、確かに何らかの処置は必要ないように見えた。

「近くに公園があるから、一回洗いましょう？」

「……うん」

数十分後、少年の足には水色のチェックのハンカチが巻かれていた。もちろん少女のものだ。二人は公園のベンチに座って、缶ジュースを飲んでいた。薄暗くなってきた中で、ベンダーの光が目立ちだしていた。

「わたし、朝日あさひ 梢しずえっていいです」

少年が名前を聞くと、少女はそう答えた。少女が目線で「あなたは？」と言ったので、少年も答えた。

「ボクは、二葉ふたば 夜空よぞら。…語呂、わるいだろ」

「ううん？　そんなことない」

梢の笑顔にうそは感じられない。

「…そう思うんなら、別にいい」

夜空は、どこか複雑な顔をした。梢もそれを敏感に感じ取ったようだけど、だからどうこうということはなかった。

次に歳を聞くと、梢は15歳だと答えた。早生まれだから、高校生だけれどまだ献血に行けないという。夜空も、自分も早生まれで、

今15歳だと言うと、梢は驚きを隠せない顔をした。

「なんだあ、同年。」

梢が驚くのも無理はない。夜空はせいぜい中学1、2年といったところなのだ。声も完璧に変わっているわけでない。

「よく間違えられるよ。学生証忘れたって言えば、中学生料金で映画も見られる」

「ふふ、私も、たまにそれやるよ。あんまり大人っぽい格好しないで、メイクもしないとけっこう大丈夫なの」

同年とわかった途端に梢は氣を使わない言葉遣いになった。表情もだいぶやわらかく豊かになる。人間、誰でも素性の知れない相手には遠慮がちになるものだ。

「二葉くんは、どこの高校に行ってるの？」

何故か梢は夜空の怪我の理由について触れない。自分から話すまで聞かないつもりなのかもしれない。

「ボク、高校行ってないから」

夜空は氣まずそうに言った。

「あ、そうなんだ。じゃあ、働いてるの？」

梢は不必要にあわてたり氣の毒がったりすることはせず、あくまでさらりと聞き返した。

「うん…、ボクずっと病気してて、さいきんやっと治ったんだ。入学式には間に合わなかったけどさ。だから、半年か一年遅れても…高校行きたいと思ってる」

氣のせいかな、その言葉はどこか空虚に聞こえた。

「へえ…病気、治ってよかったね。早く高校行けるといいね」

梢がさっきから余りにやさしいものだから、夜空はかえって申し訳なさそうに体を縮めた。

「ごめん、重い話ばかりして」

「そんなことないよ」

本心から氣にしていなことを示しているような、曇りの無い笑顔だった。しかしふいにはっとした顔になって、携帯電話を取り出し

て時間を確認した。薄いピンク色の折りたたみ式だった。

「あ、ごめんなさい、わたしこの後習い事があるの」

夜空ははっとして、少しだけ、見た目にはわからないくらい少しだけ、肩をすくませた。

「そっか。ひきとめてごめん、：ありがとう」

「ううん、いいのよ。だって二葉君のこと、最近ほとんど毎日見かけて、何だか勝手に知り合いのような気になってたの。ふふ、ごめんね。けど今日こうして話せて良かった。だってもし今日がなかったら私、話しかけたりなんてとてもできなかったもの」

しとやか、とか、品がいい、という言葉の良く似合う顔で梢はにこ、と笑った。夜空もそれにつられるように、隅のひどい目を細めた。

薄い唇をほころばせると、丸みの残る頬にごく浅いえくぼができた。

「じゃあ、ね。お大事に」

「ああ、ほんと、ありがとうな。気をつけて」

梢はベンチから立ち上がると改めてちょっと夜空を見、それからふわりと振り返って歩いていった。その後姿を、夜空は梢が角を曲がって見えなくなるまで見つめていた。

「よう」

夜空はびくりと体をすくませた。かばうように右足をベンチの中へしまい込む。

「常盤木さん・・・」

この男が、彼にとって招かれざる、しかし予期していなかったわけではない客であることは見るに明らかだ。

「ガールフレンドか？ 意外とやるじゃないか」

「：そんなんじゃないです」

声もかすかに震えている。

常盤木と呼ばれた、白衣を脱ぐとただのスポーツマンにしか見えない短髪の男は、何の遠慮も無く夜空の隣：さっきまで梢の座ってい

たところへどかりと座り込んだ。

「足に怪我したんだって？ 大丈夫か」

「もう平気です…」

夜空は微妙に手すりのほうへ身を倒した。長い前髪で顔をかくすように俯き、両手でさっきまで飲んでいたサイダーの缶を弄り回していた。

「なんで来たんですか」

「そりゃあ、大事な夜空が怪我したといやあ心配じゃないか」

「たしかに、ボクがいなくなったら次を探すのが大変ですからね」
小さな沈黙が流れて、

「……それで、今日のはどんなやつだった？ 強かった？」

男はそれを聞かなかったことにしたようだ。

「…トカゲのお化けみたいなので…すばしこくて、なかなか中らなくて手こずりました」

「大きさは？」

「これくらい」

夜空はサイダーの缶を右に持ったまま手をめいっばい広げて、すぐにぱたりと落とした。

「中型か」

男はつぶやくように言った。

「ところで少し研究所に戻らないか。先の怪物のスケッチも欲しい」

「………わかり、ました」

夜空はいかにも逆らえないといった様子で、力にねじ伏せられるように返事を搾り出した。

第一話（後書き）

読んでくださってありがとうございます！気が向けば続きも読んでくださると嬉しいです。

未熟者ですので感想・批評いただけるととてもとても喜びます。

第二話

白いカロラの軽薄なエンジン音に揺られながら夜空は昔のことを思い出していた。

昔と言ってもつい2ヶ月半ほど前の話だ。普通の2ヵ月半ならこんなに長くはないだろう。

少なくとも、順調に友達も出来、健全で平和な高校生活をスタートさせた梢よりは。

記憶に思いを馳せる夜空の頭は、傍から見ればたよりなげに、多少の振動をも拾って揺れた。

白いドア。

白い床。

白い壁。

白いカーテン。

白いパイプベッド。

白いシーツ。

白い枕。

白い掛け布団。

白いサイドテーブル。

白い花瓶。

白が、鬱積する部屋。

そこに活けられた、突拍子も無く鮮やかで豪華な花束。

：夜空は、白いベッドの上で上半身を起こしていた。

白いドアが開いて、白衣を着た男が何人か入ってきた。

何人だったのかを夜空はきちんと覚えていない。

男のうちの一人が夜空のひざの辺りに何かを投げ落とした。

夜空はそれを見た。

白い、丸みを帯びた、銃、のようなもの、だった。

手に取ると、目が冴えるようなくらくらするような、不思議な感覚に陥った。

「君にはそれが見えるのかい？」

男は興奮を抑えたような声で言った。

夜空はいぶかしげに男に向かってそれを捧げ持つと、

「これですか？」

と言った。男たちの目には、少年が自分たちに向かって両手を伸ばしているようにしか見えなかったようである。

ピー、ピー……

安っぽい電子音に夜空ははっとした。車が後ろに動いている。ギアをバックにまわすと流れる音だった。そこはコンクリートに白いペンキで仕切られた、小さな月極駐車場である。

「はい、お疲れ」

ご丁寧にご丁寧にドアまで開けられて、夜空はあいまいに会釈をしながら外に出た。

その駐車場からほんの少し歩くと、完璧に風景の一部に同化した小さなビルがある。なんの汚れだか、白い建物の壁には黒い筋が何本も落ちていた。ビジネス街のはずれ、細い裏路地に面したそれは、研究施設、なんて印象はこれっぽっちも与えない。せいぜい儲からない学習塾である。夜空は、引きこもりの少年張りに長い前髪の内側で顔をしかめた。

「足は大丈夫か？」

なかなか歩かない夜空に文句でもあるのか、男は調子はずれなねぎ

らいをした。夜空はかぶりを振ると、よほど弱みを見られたくないのか無理に普通に歩いた。水色のチェックのハンカチが右足で揺れた。少しだけ血がにじんでいた。

ひんやりとしたエントランスに、エレベーターが一台、ある。それ以上のスペースは無い。男が『△』ボタンを押すと、どこかギクシヤクした動きでそれは開いた。

どうせ五階までしかないビルの三階を押す。なんとも頼りない音と揺れで動き出した。

夜空は、何ともなしにエレベーターの背面に張られた鏡を見た。前髪が長い。その下の肌は青ざめて、血管が見えそうなほどだ。

目の下の隈が彼の思っていたよりずっと濃く、夜空は眉をしかめて鏡から目をそらした。

「もう夜空はどれくらいの数戦ったのかな」

自分の世界に入りかけていた夜空は、耳から入ってきた情報にびくりと反応した。

「……どうせ常盤木さんは知ってるんでしょ」

「ははは、まあね。14回だ、今日も入れて」

なら聞かなきゃ良いのに、と夜空が下を向いたとき、エレベーターが止まった。まったくもって滑らかさに欠ける動きで開く。

常盤木は、元気の無い人間が見たら癪に障るくらいエネルギーだ。筋肉の厚みを感じる背中は、なるべく省エネで生存している夜空にしてみたらくらくらする位精力的だ。歩く姿は多少の上下動さえ伴っている。もちろんと言うか、夜空はそれに好意を持ったことがない。いきいきとした者全てが嫌いなわけではない：むしろ自分に無い魅力を感じている。しかし彼は：彼の背中、なにか嫌味な、弱いものを一生涯でできなさそうなものに見えるのだ。

こんなに疲労し、消耗した少年に比べ、この男はなんと健康で、な

んと苦勞を知らず、なんと独善的なことだろう。

夜空は、文句は言わない。その（・・・）仕事は夜空にしか出来ないことなのだ。

研究室の無機質な臭いと余りの生活感の無さに、夜空は唇を固く結んだ。

そこは夜空の嫌悪し恐れている場所であり、彼の唯一帰れる場所だった。

「これでよし」

何とも言えない広さの、会議室のような部屋。ドアから正面にはホワイトボードが張られていて、机はキャスターのストッパーを外せばどんどん勝手に動いてしまうタイプの、2、3人掛けの白い会議用のものだった。

とりあえず夜空は研究員の一人に足の消毒をされて白い包帯を巻かれた。水色のチェックのハンカチは血で汚れてしまった。洗っても落ちないかもしれない。

「それ、とりあえず洗ってみようか」

「えっと…」

「いいよ、やっとかから」

夜空が言葉を継ぐ間もなく、若い白衣姿の男はそれを持って行ってしまった。

夜空は薄々分かっている。それは本当の親切ではないことを。そしてこの研究員のほとんどはこんな調子だった。

「さて、夜空君」

入れ替わりに常盤木が入ってきた。右手にA4くらいの画用紙を3枚ほど、びらびら言わせながら。左手には尻尾に消しゴムの付いた鉛筆と、それとは別にMONOの消しゴムを握っていた。

歩幅が広い所為か彼はあっという間に夜空の向かいまでやってく

る。力強く椅子を引き寄せると、ドツと音がするのではないかと思うくらいの勢いで座った。

うわしゃ、と言うような音をさせて、画用紙がくねりながら机の上に広げられた。机の白と画用紙は完璧に同調して、すこし視力の悪い者が見たならば境目さえ分かりそうに無い。

「また、頼むよ。今回の“侵略者”と今の銃の形」

「…はい」

夜空は渡されるままに先によく尖った細長い六角柱のそれを受け取ると、紙に顔をうずめるような姿勢で右手を動かした。

常盤木は相変わらず向かいに座っているが、夜空の姿勢が悪い上、前髪がすだれの様に画用紙につく位まで垂れ下がっているので、夜空が今何を描いているのかを見ることができない。

「そんなに顔を近づけちゃ目が悪くなるよ」

「…はい」

一応、少しは頭を上げてみるが正常には程遠い。常盤木もそれ以上は特に何も言わずにおいた。

しばらくの間、二人しかない部屋に、時計の秒針と鉛筆を滑らせる音と、あとは僅かな衣擦れの音ばかりがいやに響いた。エアコンも点かない空間では静寂が耳に痛い。

やがて夜空は一枚のスケッチを完成させ、常盤木のほうへ押しやった。それを受け取った常盤木はその画を両手で持ち、遠ざけて見たり近くで見たりした。

「爬虫類？」

夜空はかすかに頷く。

それは奇妙な怪物だった。

フォルムはぬめつとしているのに表皮自体はボコボコの、肋骨の浮き出た、トカゲのお化け。目は黒目ばかりで、細長い胴体から生えた短い足には親指（の、ようなもの）もあわせて指が五本あり、水かきのようにそれぞれがつながっていた。長い尻尾の先には、ごつごつとした岩の塊のようなものがついている。振り回せば生身には

恐怖なくらいの武器になるだろう、どこかモーニングスターを想像させた。

そういったものが、真冬の枯れ木のような、胸の締まる鉛の色彩と繊細なタッチで描かれている。

彼と同年代の学生の大半が描くものよりずっと熟達して、ずっと、淋しかった。

「大きさは」

「…これくらいです」

両手を広げる。常盤木に同じ事を二回以上言わされることは特に珍しいことでもなかった。

「まあ：155cmってところか」

それは、ちょうど夜空の身長と同じだった。

「尻尾も入れて？」

「そうです」

シャツ、シャ。

細い線で描かれた怪物の画のすぐ下に、力強く155、と書かれた。1が、5が、5が、それぞれ絵につきささり、めちゃくちゃにしそうなくらい、その三つの数字は太く、強かった。日本列島の動物が外来種に生態系を破壊される様を連想させる。

「じゃあ次、今のフィクション・ウェポンの状態も描いてくれる」

「はい」

ふたたび常盤木から鉛筆を受け取り、夜空は腰のホルダーから何かを出し、画用紙の奥、ちょうど常盤木の目の前に置く動作をした。その空間には何も無い。

少なくとも夜空以外の人間には。

夜空はその置いた『何か』を、たびたび顔を上げて凝視しながら二枚目のスケッチを描きはじめた。

「この前は、わりと小さくて四角い感じのだったね。あれから何か変わったかい？」

ちなみに言うと、夜空は常盤木の、この人間に向けて喋っている感

じのしない猫なで声も好きではない。音程としてみたら低い方ではあるのだが、硬くてどうもなじめなかった。

「今は…丸っぽくて、赤くなってきた気がします。あと、グリップのところ、飾りみたいなのが…」

言っている間も手を動かす。二枚目の画用紙に、だんだん銃のよ
うな輪郭が生じる。

「飾り？　なるほど、興味深いな。大きさは？」

「前よりは大きくなってきてて…撃ったときの威力も、多分上が
ってます」

鉛筆が細部に渡って行く。緻密である割には描くスピードがとて
も速かった。

グリップ部の装飾にとりかかる。トリガー付近には何も付いてい
なかったが、手の当たりそうに無い所が、陶器の絵柄のようになっ
ている。その模様は和風の小物か何かに似ていた。

「威力が上がったか。形状がどんどん変わっていくと聞いたときに
はもしやと思ったが…やはりな」

ほとんど独り言だが、もちろん夜空にはばっちり聞こえている。

「変わらないもんなんですか、普通」

絵はほとんど出来上がっている。今は細かい陰影をつけていた。夜
空の絵はこの作業でどんどん寂しくなっていくらしい。

「変わらないと思っていたよ、普通」

「…ボクは…変ですか」

鉛筆が止まる。描き終わったようだ。それを取り上げて、常盤木は
すばらしい、とつぶやいた。

「いや、むしろ喜ぶべき兆候さ。この武器は何度か実験は行ったが、
本格的に使用したのは君が初めてだから、実際何が起こるのかは殆
どわかっていない。変わらないと思っていたのも単なる仮説だから
な」

何がどう喜ばしいのか、夜空にはよくわからなかった。

第三話

「主任、また現れました、“侵略者”です！」

部屋の外から、研究員が叫んだ。

夜空の顔が強張る。机に置かれていた“それ”を強く握り締めた。

常盤木はもう立ち上がって、部屋に入ってきた研究員となにやら話していた。

夜空はゆっくりと立ち上がった。

あの研究員（夜空の記憶が正しければ確か安西、といった、痩せて目の細い若い男。しかし夜空と話したことはあまりなく、名前を覚えていてもそれを呼ぶ機会さえなさそうだ）と常盤木が何を話しているにせよ、どうせ夜空のやることは同じである。

常盤木の近くまで歩み寄ると、彼は夜空のほうへ振り返り、肩に手を置いた。

でかくて熱い手だ。その手でそうされると、夜空は自分の領域に土足で踏み込まれているような気分になる。

——あの手は違った。

ふとそんなことを思う。

さつき公園でハンカチを巻いてくれた手は違った。

常盤木のようなぶしつけな手ではない。医者や看護師の業務的な手でもない。

渴いた喉に、やさしく水を流し込んでくるような手だった。

「あさひ、こずえ」

その名前を小さく口の中で呟くと、なにかむずがゆいような、指先が温かくなるような気持ちになった。

「ん？ どうした？」

常盤木が怪訝そうな顔をした。

夜空は急にはずかしくなって、いそいで首を横に振った。

「何でもないです。…次の“侵略者”は？」

「ああ、それなんだが、すぐに行けるか？ 車を出すから」
行けるか、も何も、夜空が行かなければ話にならない。

白いカローラにまたエンジンがかかる。

後部座席に乗り込んでドアを閉めると、何とも言えず軽薄で安っぽい音がした。

「悪いな、怪我したばかりで」

「いえ…」

ポケットの中でピルケースを弄り回しながら夜空は答えた。

ずっと前から気になっていたことを、今日は言えそうな気がしていた。

「あの…」

「ん？」

サイドミラー越しの彼は、前方に注意を向けているが一応質問には答えてくれそうだった。夜空は少し高まる鼓動で舌を空転させながら、言った。

「あの化け物って、普通の人には見えないんですよね」

「ああ、そうだよ」

角を左に曲がりながら、常盤木はいぶかしげだ。だから何？ とでも言いたげだ。

「…普通の人には、触れないんですよね」

「ああ」

「じゃあ：あの化け物は、誰にとって危険なんですか？」

聞いた、と夜空は胸をなでおろしながら、常盤木の返答に全身の神経を緊張させた。

そう、夜空は、いまだに誰のためにどうして戦っているのかわからない。知らされていなかった。

サイドミラーで、常盤木の口が開く。右の道からの左折車に目を向けているから、表情は良く見えない。

「ちゃんと説明したことは無かったっけか？　夜空には少し難しい話かもしれないなあ」

でも噛み砕いて話すか、とひとりごちた。―知りたいもんな。

「確かにあの化け物は誰にも見えないし、誰にも危害を加えない。けど、世界の：情報を奪おうとする。パソコンはやったことあるかい？」

「少しだけ」

「じゃあ、ウィルスは知ってる？」

「病院で、看護師さんとか、入院患者の人からちよつとだけ聞いたこと、あります」

「あの化け物は、そのウィルスみたいなもんだな。君が接続剤を飲んでる間、見えている世界は本当の現実じゃない。データ化された現実、つまり非現実だ。化け物は、世界のデータを盗んで、最終的には非現実のデータと現実の世界をつなげようとしている。もしそうなれば、簡単に言えば化け物は現実の世界にも現れて、普通の人を襲ったりするようになる。まあ、これは単なる例だけだな。それで、実は、そのフィクション・ウェポンと接続剤は、非現実と現実を繋げる装置だ。奴らの一歩先を行ってる。邪を以って邪を制す、といったところかな。といっても力を及ぼせる範囲は非現実に対してだけだから、完全なものではないけどね」

夜空は、途中からわけがわからなくなっ、ただ等間隔に瞬きをするくらいしか動かなかった。

「わかったか？」

夜空はゆるゆると首を横に振った。聞いたかったことは、何一つ語られていない気がする。

「まあ、要は地球には君が必要ってわけだな。…そろそろ、着くぞ」
考えるのをやめにして、夜空はポケットからピルケースを取り出した。

ケースを開けて、白くて丸い、FL、と押された錠剤を手のひらに出す。

四粒、ばらっと出て、二粒戻して、残りを口に放り込んだ。

喉がクツと動く。

何回か瞬きをして、だんだんと瞳が潤んで充血してくる。

しかし反対に、肌はいつそう血の気が引いていった。筋肉が透けて見えそうなほどだ。

車が止まった。

そこは住宅街の公園。白々しく木が一本生えて、遊具もあまりない。土は砂利質で、灰か鉄っぽい色だ。擦りむけば小さな砂利粒がめり込みそうだった。

常盤木が携帯電話で研究所と連絡をとりあっている。程なくしてパチリとそれを閉じた。

「着いた、夜空。ここだ」

夜空はもうそれを聞いていない。なぜなら、薬の効いた彼はすでに『それ』を視覚で捉えている。熊のような、巨大な四つ足の猛獣だった。まだ車から10mほど離れているが、ゆったりとこちらに近づいてきている。

銃を、お守りのように胸に握りこみ、背を丸めて目を閉じた。何事かを口の中でつぶやく。

それは、祈りの姿勢そのもの、だった。

そして決心したようにその瞳が開かれた。重いシャッターを大きな力で押し上げるように瞼を開きざま、左手で乱暴にドアを開け、右手で素早く発砲する。

一瞬かと思われる間に3発撃たれたそれは、内1弾をかすらせ、2弾を左肩にしたたか命中。しかし全身を黒っぽい体毛に覆われたそれはびくりともしない。しかしのっそりと、小さな瞳にはっきりとした方向性をもって夜空に近寄り始めた。夜空はそれと同じ分だけ後退して距離をとりながら、今度はしっかりと狙いを定めて2発、発砲。今度は確実に胸部に命中。化け物は爪の長い前足で被弾した箇所をうざったそうに掻いた。

夜空の背に、悪寒が走った。

巨体の剛毛に埋もれた、黒い瞳に、明確な凶暴性が宿ったから。

思わず引けた少年の腰を見逃さず、それは後ろ足で立つようにして獲物に飛びかかった。

すんでのところで転がりよける夜空。しかし化け物は更に黄ばんで鋭い爪を横に薙ぐ。

夜空は押しつぶしてうめいた。フィクションウェポンが回りながら地面の上を転がっていく。右腕を、左手の指先が白くなるくらい握り締めながら、中腰で走って逃げる。迫る地鳴りを背中で感じながら、夜空は銃の方向へがむしゃらに走った。半身をひねり後ろを顧みると、視界いっぱいには広がりかねない、頭部。まっすぐこちらに向けられた漆黒の虚無。狂気。小さいと思っていたそれは至近では野球のボールほどもあった。それが2個。夜空は右足に左足がひっかかり、いやそれより腰を抜かしたのが先か、そこで尻餅をついた。

足と尻が砂を掻くむなしい音が獣の荒息に重なる。夜空の右手は指の股まで赤く染まっていた。獣の胸にも赤茶が散らばっている。それに気づく頭もなく、夜空は左手を地面の上にまさぐらせた。何度も何度も空転し、爪に砂が溜まり、やっと指先にそれを捕らえ、引き寄せる。熊は右の爪を振りかざす。それが振り下ろされるより早く、夜空は左手の延長上に凶獣の額をとらえた。瞳がずっと鋭くなる。

爆音。それこそ、爆音。破裂。

一瞬夜空はわけがわからなかった。

そのあと低い耳鳴りの中に、過ぎる大音声が頭蓋骨を狂わせる。それは巨大すぎる獣の、巨大すぎる断末魔だった。

乾いた瞳に気づき瞬きをしたとき、コマ送りで眼下に迫る赤と茶のコントラストに、意識が目覚めた。目覚めたが、何が起こったのか理解が出来なかった。

そして、理解できたころには遅すぎた。

「うああああああ!!」

「夜空!」

常盤木の目に、右腕から血を流して仰向けに倒れた夜空が映っている。胸から下は不自然にひしゃげてつぶれ、地面に押さえつけられていた。

走り寄り、

「夜空!」

かすんだ視界に、ぼんやりと人影が映る。夜空は必死でそちらへ左手を伸ばした。

そのとき初めて、銃が腕に絡みつくような姿に変わっていることに気がついた。だからあんなバカみたいな威力が、と頭のどこかが冷静に回った。

「…きわぎさ…すけて…」

胸が圧迫されて声が出ない。

常盤木は、夜空の左腕と肩を持って、そのか細い体を引き寄せた。『それ』を見ることが出来ないものでも感知できる、重み。そのものに触れることは出来ないが、触れることの出来る者に働く力はなくならないらしい。

「頑張れ」

彼は十分頑張っているわけだが、それでも常盤木のボキャブラリーはそんなもんだった。

ズ、と夜空の体が動いた。伴って苦しそうにうめく。しかしそれからはスムーズに、そして無事に、彼の体は助け出された。

夜空はのたうつようにうつぶせになり、胃までせりあがりそうになる程激しく咳き込んだ。息を吸うたびに肺が握りつぶされるように収縮する。

常盤木に背中をさすられながら、夜空は寒い、と呟いた。

「目標、消滅しました」

「夜空の状態は？」

「右上腕部に負傷。出血やや多いです。肋骨損傷の恐れもあり」

震える夜空を常盤木が毛布でくるんだ。車内のエアコンをその季節に見合わない温度に上げる。

夜空は細い体を縮こまらせて震えていた。あの葉が切れると、以前から寒気を感じることはあった。しかし、ここまで病的になるこ

とは、なかった。

唇が青い。大げさでなく青い。瞳は焦点が合わない。右腕で左腕を、左腕で右腕を抱きしめ、足の間に広がる車のマットをじりじりと睨み付けるような形だ。

夜空の頭は混濁していた。寒くて寒くて仕方なく、体の中心が凍っているようだ。

―この寒さを、お願いだ。どうにかして。

怖い。怖い。

逃げなければならぬ。しかし体が震えて動かない。

逃げなきゃ。逃げろ。逃げろ！

足元を、無数の虫がぎっしりと蠢きまわっている。

足に、足にまで這い上がって来た！

ぶるっと大きな震えが走り、正常な意識が夜空の体に舞い戻った。

得体の知れない寒気も消えた。急に自分が汗をぐっしりかいていることに気づいた。毛布をかなぐり捨てるように取ると、常盤木はそれを受け取った。

「もう大丈夫か？」

「ボクは…」

「あんなのと戦って神経が高ぶったんだろう。心配することは無い」
夜空は茫然と常盤木を見た。そう…そうかもしれない。

しかし果たして…本当にそうだろうか？

夜空の頭に不安がよぎる。しかしそれ以上、追及することはしなかった。できなかった。とても、できなかった。

第四話

ラ、ファ、ソ、ド。ド、ソ、ラ、ファ。

梢はチャイムの音を唇でなぞった。左肘で軽く頬杖をついて、窓の外に視線を泳がせる。今日も天気がいい。日増しに夏らしくなっていくが、まだ不快なほどの気温も湿度も無い。これから梅雨も来る。今はまだ、きらきらと晴れていた。

第一志望で受かった高校は、最初に見学に来たときどおり、とても梢と雰囲気合っていた。女子高だが粘っこいところがなく、生徒も教師も穏やかで明るい、勉強のしやすい環境だ。多少校則は厳しいが、それは並みの女子高によくある位で、今のところ彼女は気になっていない。おなじ中学から上がってきた友人は一人もいなかったけれど、とりたてて外交的でない彼女でも徐々にクラスに慣れつつあった。

「梢、何か良いことあったの？」

うん？ と梢は視線を窓から目の前の友人に移した。一学期の初めからお弁当と一緒に食べている、バスケ部で割りとさっぱりした性格の子だ。梢はにこ、と笑った。

「香菜ちゃん。昨日の帰り道に、ちょっといい事」

「ああ、あの橋のところの男の子、って話？」

ショートカットがさわやかな彼女…香菜は梢の向かいにしゃがみ、

机の上で腕を組んだ。

梢は返事の変わりにこくりと頷いた。

けれど、あのときの彼の状態を思い出すと、自然と微笑が消えた。

「で、何者だったの？ 何があったか教えなさいよ」

「足を、怪我して倒れてた」

「え！？ 何、それえ」

地でアイラインを引いたようなくつきりした目を、大きくして驚く。紅いくちびる、屋内競技特有の白く美しい肌。とりたてて遠目にも目立つ特徴がなく、肌も白とは言いがたく平均的に健康そうな色味の梢とは正反対で、それが梢にはひどく魅力的に感じられていた。

「わかんない：けど、すごく疲れてるみたいだった。すごく簡単に手当てして、少し話もしたけど：」

「話したの！？」

「うん。歳は15歳で」

「タメ？ だって前中学生くらいだって」

「でも、そうだったんだって。背は、私と同じくらいだったと思う」

「ちいさくね？」

「まあ：そうなるのかなあ」

確かに、梢一人の目で見ていたときは冷静な批判をしなかったが、客観的な目としてその言い分は正しい。そうか、あの子は小さかったのか：そんな今更なことを、梢は思った。

「で、じゃ、どこ高？ 聞いた？」

「行っていないだって。病氣してて入れなかった、って」

ふうん、と香菜は相槌を打った。くしゃくしゃと頭を掻く。

「何かさあ、こう言うのもあれだけど、あんまり関わらないほうがいいんじゃない？ アブなそうじゃん」

香菜の言うことももっともなのかもしれない、と梢は思う。彼女にしても意地悪のつもりで言ったのではないということは分かっていたから。素直すぎて少々無防備なところのある子ではあるが、それ故に純粋な優しさを持っている。言いくいことでも友人のためを思うことであればあえて告げるというのは、梢が本人の口からいつか聞いた、彼女自身の思想でもあるし実践していることであつた。

：けれど。

長い前髪の内側から、はにかんだように笑ったとき、はらりと覗いた瞳。

瞳が。

こちらまで切なくなるくらい、澄み渡っていた。

「ふたば、よぞら」

梢は小さく口の内ではいた。

第五話

『どうだ？ 夜空。苦しいところ、ないか』

『パパ！』

——やさしく頭を撫でる、ひんやりして大きい手。世界で一番大好きな手。自分は将来、こんな手の男になれるだろうか？

『最近あんまり来れなくて、ごめんな？』

『ううん。さみしくないよ。パパが持ってきてくれた本読んでるから』

『でも、家にあるの適当に持ってきただけだから写真集ばっかだぞ？ つままないだろ』

『楽しいよ！ ボク、写真大好き』

『そうか。夜空はパパと趣味が合うな』

『えへへ』

——何度も見て、どこにどんな写真があるのかも憶えてしまった写真集。風景、人物、動物、植物。どれも生き生きとして色があふれている。外の世界はどれだけ美しいことだろう？

『今な、夜空でも走り回ったり冒険したりできるゲームを作ってるんだよ』

『本当に？ コントローラーで動かすテレビの奴じゃなくて？ ボクも走っているの？』

『そう。ヘルメットみたいなのを被って、頭の中で冒険するんだよ。本当に体を動かすんじゃないから、大丈夫だ』

『すごい！ すごい、すごい！ 早くやらせてね、パパ』

『もちろんだ。もうちょっと待っていてくれな、すぐできるから』

『でも無理しないでね』

『はは、ありがとうな。でも大丈夫。今回はすごい仲間がついてるんだ。完成したら、真っ先にパパと遊んでくれよ、夜空』

幸せな記憶。もう戻らない過去。

今は、本当の足で走り回ることができる。

しかし彼と冒険することは、二度と出来ない。

夜空は目を擦った。自分が泣いていると分かると、不思議なことにますますそれは溢れ出した。やがて嗚咽に変わる。まだ肋骨が痛んだ。

どうしてこんな夢を見たのか？ 多分、ここがそこだから。夜空がたった2ヶ月前までの人生を過ごしてきたところ。また来ることになるとは思ってもみなかった。

あの後、夜空はその足で病院に連れて行かれた。

病院に行くのだということは容易に想像のつくところだったが、つい最近までの人生で病院から出たことがほとんどなかったので、いざ視界に入ってくるまでまさにこの病院に向かっているのだということに気づかなかった。

常盤木は必要な手続きなどの一切を行った後、なにやら携帯で話していたが、いつの間にかいなくなっていた。

白い部屋。何もかもが白い部屋。そして一人きりの部屋。全てがあの時のままで、夜空は相変わらずしゃくりあげながら、何だか笑いたくなった。

健康になれば全部うまくいくと思っていた、近い近い過去。世界は美しいものが無限にあると思っていた。今は分らない。白い壁よりはいろんなものがある。それは確かかもしれない。けれど、かつては、いつか父とキャッチボールをするためにあった体が、今や

得体の知れない怪物を倒すためだけの体になってしまったことは間違いない。

右腕の包帯をまじまじと見た。何針縫ったのか、よく思い出せない。こんなに深い傷を負ったのは初めてだった。最初のころは、もっと小さくて無抵抗な怪物だった。夜空の存在に気づいてもあまり攻撃もしてこなかったし、もともと襲ってくるようなものではなかった気がする。他に何か目的がありそうな動きをしていた。それがだんだん、明らかに夜空を狙うようになり、姿かたちもいかにも強そうな、凶暴なものになっていった。特に昨夕の熊のお化け。おかげで、初めて治療と検査のために入院することになったわけだ。

（ボクは、いつまで戦えばいいんだろう）

それは、最悪の回答を予測すると、考えることすら怖くなってくるような問いだった。

「検温の時間です」

前までは見たことがなかった若い看護師が入ってきた。けれどやはり、ナースキャップも制服も見慣れすぎて夜空には怖いくらいだった。

体温計を脇に挟みながら、左腕の銃の存在を思い出す。

熊の化け物と戦ったときからまた少し形が変わっていた。

見た瞬間、何かがよぎる。

間違いない、化け物がいる。

「接続剤は…」

夜空は呟いた。

「どうかしましたか？」

若い女の看護師は、よく聞き取れなかったし、言葉の意味が分からなかった。

「ボクの持ち物はどこにありますか」

今度は、決然とした口調。左腕に絡みつく銃が、その言葉に呼応するように、はげしくうねりはじめた。銃口が小さくなっていき、銃身が細長くなっていく。徐々にそれは光り始め、銀色になった。

「ああ、その引き出しですよ。着てきた服も一緒に」

「ありがとうございます」

言うが早い、夜空はベッドを降りて引き出しを開けた。

「あら、ちよつと…！」

あわてる看護士をよそに、夜空は手早くジャージを取り出し、ポケットからピルケースを引っ張り出した。

すばやく蓋を開けて2粒口に放り入れた。

そして病室を飛び出す。

「夜空君っ!？」

看護士はとっさに夜空の腕を引っつかもうとして、だめだった。

夜空はぐいぐい走っていく。

看護士がナースコールに向かって何かを言っているのが遠くに聞こえたような気がしたが、夜空はぜんぜん気にならなかった。

視界に、だんだんと白い鳩のようなものの群れが院内を猛スピードで飛び交っているのが浮かび上がってくる。20:30。羽音はヘリコプターが至近で離着陸しているかのようだ。それが白い塊となって狭い廊下の角を曲がりまくる。夜空は追った。ゼロゼロと喉が鳴ったが不思議と疲れを覚えなかった。走りながら左腕を構える。それはまるで、剣の様に銀色に輝いていた。先端から、タタタツと音を立てて銃弾が飛び出す。何羽かが乳白色のような液体を撒き散らしながら群れから離脱し落ちた。落ちて尚もがき、飛び立とうとするそれを夜空は銃の先で振り難いだ。それは真つ二つに切れた。そして動かなくなった。断面は陶器のように白かった。

夜空は群れを追い続け、撃ち続けた。3階、4階、5階。群れは

どんどん階を上がっていく。それに伴って1羽、2羽と撃ち落され、やがて最後の1匹になった。狙いが限られるのでなかなか中らない。手こずる内、ダンボールなどが置かれて暗い階段に差し掛かる。夜空が昇ったことのない階段だった。

夜空は追った。狙いを定め、定め……そして……

！！

目の前が白くなる。いや、目の前に切り取られた長方形の中が。暗い階段に浮かぶ、放たれた屋上のドア。陽の光。一面のシート。鳩はどこだ。はためくシートにまぎれてしまったのか。

夜空は屋上に降り立った。あたりを窺う。

床に、揺れる小さな影。見上げる。鳩だ。青い空に浮かぶ鳩。

鳩はひらりひらりと紙くずのように舞い飛んでいく。夜空はその幻想的な光景にとらわれ、ぼうつとそれを目で追った。

自然、屋上の奥のほうへ目が行く。誰かがいた。男。こちらに背を向けて、長いスプリングコートを着ている。

鳩は視野の中で消しゴムほどの大きさになり、ひらりとその男の肩に止まった。

男は鳩を手にあやし、左の人差し指へ移し止らせ、右手でその喉を撫でくすぐった。

鳩もそれをおとなしく受けている。

そして、男は鳩の首の辺りを掴むと……

「鳥よ。疲れただろう」

——握りつぶした。

鳥は、乳白色の液体になって散り消えた。

「……!!」

夜空は、接続剤が効いている内はあまり論理的に働かない頭で、それでも目の前の状況に戦慄に近い衝撃を受けた。

男の残酷さには、ない。同じことは夜空も何十倍だってしている。

何故

何故、彼は化け物に触れるんだ??

男は振り向いた。夜空にはまるで望遠鏡を覗いているように男の細部まで見えた。

白髪の混じった、やや短い頭髪。口回りには皺が刻まれている。

若くはない。ただ、老いてもいない。痩せて少し姿勢の悪い、研究者然とした男。

「誰だ……ッ」

夜空は何とか搾り出した。

「フフ、声がひっくり返っているぞ、夜空君」

タバコの臭いがするような声だった。

「君に化け物をけしかけているのは、私だ」

唇が、スローモーションのように動いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4103a/>

FICTION-LINK

2010年10月10日02時51分発行